

奄美諸島先史時代における植物食利用

高宮広土

Plant Foods Consumed During the Prehistoric Times in the Amami Archipelago

TAKAMIYA Hiroto

鹿児島大学国際島嶼教育研究センター
International Center for Island Studies, Kagoshima University

要旨

奄美諸島先史時代の遺跡からは動物遺体が検出されることはほとんどなく、先史時代の人々がどのような植物食を利用していたかについては、全くといっていいほど解明されていなかった。1990年代後半になって炭化種実を回収する目的でフローテーションという方法が奄美考古学に導入され、この20年間ほどで先史時代における植物食利用が徐々に明らかになりつつある。

はじめに

1980年代まで奄美諸島においては宇宿貝塚から検出された堅果類と神野貝塚より出土したタブノキのみが先史時代遺跡より回収された植物遺体として知られていた(中山 2007; 上村・本田 1984)。1997年に用見崎遺跡において初めて奄美諸島でフローテーションが導入され、その後の20年間で数多くの遺跡においてフローテーションが採用された。その結果、奄美諸島先史時代における植物食利用が1997年以前と比較するとある程度理解されつつある。

奄美諸島先史時代における植物食利用

はじめに記したように1980年代までに植物遺体が確認された遺跡は前4期の遺跡である宇宿貝塚から堅果類が、そして前3期から前4期の遺跡である神野貝塚からタブノキが知られているのみであった。人類学的には南に位置する地域および魚介類が豊富でも海獣にある程度依存できない地域では植物食が重要であると指摘されていた。しかしながら、1990年代前半まで、植物遺体が検出された遺跡は2遺跡のみであった。奄美諸島の先史時代人はどのような植物食を利用して生存したのであろうか。

奄美諸島の先史時代は大きく分けて旧石器時代(約30000年前~10000年前)、貝塚時代(約7000年前~1000年前)およびグスク時代(約1000年前~600年前)の3つの時代から成り立っている。旧石器時代は世界的にみて狩猟採集の時代であるので、奄美諸島でもこの時代は狩猟採集の時代と推察されていた。問題は続く貝塚時代で、宇宿貝塚や神野貝塚出土

の植物遺体からは野生種の利用が予想されるが、沖縄諸島を含めこの時代の遺跡出土の植物遺体があまりにも少ないため、貝塚時代には農耕があったのではないかという仮説も提唱されていた。奄美諸島貝塚時代の遺跡でフローテーションを利用して植物遺体の回収を試みた遺跡は以下の遺跡である。半川遺跡（奄美大島、前2～3期と想定された）、崩り遺跡（喜界島、前4期）、塔原遺跡（徳之島、前5期）、住吉貝塚（沖永良部島、前5期）、用見崎遺跡、安川遺跡およびマツノト遺跡（3遺跡とも奄美大島、主に後2期）。これらの遺跡からはイタジイなどの堅果類等の野生種のみが検出されている。貝塚時代農耕仮説が提唱されていたが、この時代には農耕はなかったと考えられる。

グスク時代はその生業の中心が農耕であったと考えられていたが、狩猟採集から農耕への変遷のタイミングおよびグスク時代農耕の特徴はほとんど理解されていなかった。グスク時代人は本土弥生時代人のようにイネをメインとしていたのであろうか。貝塚時代末からグスク時代初期の遺跡として次の遺跡でフローテーションを実施した。赤木名グスク（奄美大島）、山田中西遺跡、山田半田遺跡、前畑遺跡、小ハネ遺跡、大ウフ遺跡（以上喜界島城久遺跡群）、崩り遺跡（喜界島）および前当り遺跡（徳之島）。これらの遺跡より回収された植物遺体から以下の2点が明らかになりつつある。まず、検出されたオオムギやコムギなどの栽培植物を直接炭素年代測定法により年代を測定したところ、奄美諸島における農耕の始まりはおそらく8世紀から12世紀であろう。また、赤木名グスクの人々はイネを中心とした農耕であったと考えられるが、他の遺跡ではイネ以外のオオムギ、コムギおよびアワが重要であったと考えられる。グスク時代初期農耕の特徴を理解するためにはさらなる検証が必要である。

奄美諸島において先史時代の植物食利用に関して最も重要な発見の一つは上記した半川遺跡である。この遺跡からは多量の堅果類が回収された。共伴土器が条痕文で、この土器をもとに前2～3期と想定された。しかしながら、検出された堅果類子葉（シイ属）2点を炭素14年代測定法により年代測定したところ、2点とも11200年前という年代であった。この年代は本土の縄文時代の中でも最古の部類に入る堅果類である。この年代測定結果は、少なくとも奄美大島では更新世末期からシイ属が利用されていたことを示している。

おわりに

約20年前までは奄美諸島先史時代人の植物食利用は推測の域でしかなかった。1997年から発掘調査に導入されたフローテーション法により徐々にではあるが、先史時代における植物食利用が解明されつつある。まず、世界的な傾向から旧石器時代は野生植物を利用していたであろう。つづく貝塚時代の人々も堅果類などの野生植物に依存していた。この点は大変貴重な情報である。その理由は奄美諸島のような島で狩猟採集が数千年存在した島は世界的にみて、奄美諸島とその南に位置する沖縄諸島しか知られていないからである。しかし、約8～12世紀に狩猟採集から農耕への変遷があった。奄美諸島の初期農耕に関しても徐々に判明しつつあるが、さらなる情報が必要である。

引用文献

- 上村俊雄・本田輝道（1984）「沖之永良部島神野貝塚Cトレンチ発掘調査概要」『南西諸島の先史時代における考古学的基礎研究』上村俊雄（編）、pp.51-60.鹿児島大学法文学部考古学研究室：鹿児島市
 中山清美（2009）『掘り出された奄美諸島』財団法人 奄美文化財団：奄美市